

### 第3章 吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査

#### 1 調査の経過

昭和61年7月15日、施設部より国際交流会館等6件の新営工事が、追加事業計画として埋蔵文化財資料館運営委員会に諮られた。昭和61年度の事業計画は、年度当初すでに同委員会です承されていることから、工事計画の追加は資料館の事業の途中変更を余儀なくし、その年間事業量を大幅に圧迫するものであった。したがって、同委員会は協議の結果、調査日数および資料館の事業計画、関連部局の意向を勘案して、緊急度の高い工事計画について発掘調査を実施することとした。前章で述べた山口附属学校の試掘調査もこうした経緯のもとで実施されたものである。

同年11月にいたり、国際交流会館新営計画の具体化をうけた事務局よりの調査依頼に基づき、同委員会は協議の結果、資料館業務との調和をとりつつ発掘調査を実施することとした。工事は吉田キャンパスの南端中央部、現人文学部校舎南側の独身宿舎とハンドボールコートにはさまれた地域約680㎡が予定される。

当該地域は、東に隣接する女子寮（榎野寮）および附属農場飼料園のある台地に比べて階段状に約5m低くなっていること、また、昭和53年度に実施した人文学部校舎新営に伴う発掘調査で顕著な遺構・遺物が認められなかったことなどから、当該地域周辺は大学統合移転時の造成等により学内の他の地域以上に削平を受けていることが予想された。したがって、まず新営予定地内の埋蔵文化財の有無を把握するためにトレンチによる試掘調査を実施し、遺構・遺物包含層が確認された場合には、調査結果をふまえ再度運営委員会においてその取り扱いについて協議することとした。

新営建物は2棟で、既設の職員宿舎4棟を解体、撤去後の跡地に建設が計画さ

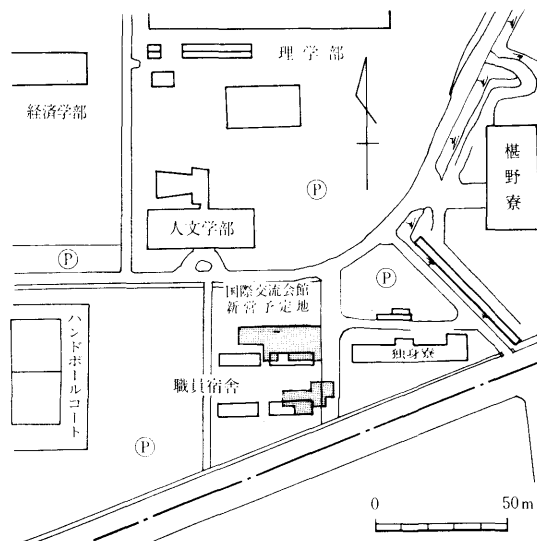


Fig. 22 調査区位置図

## 吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査

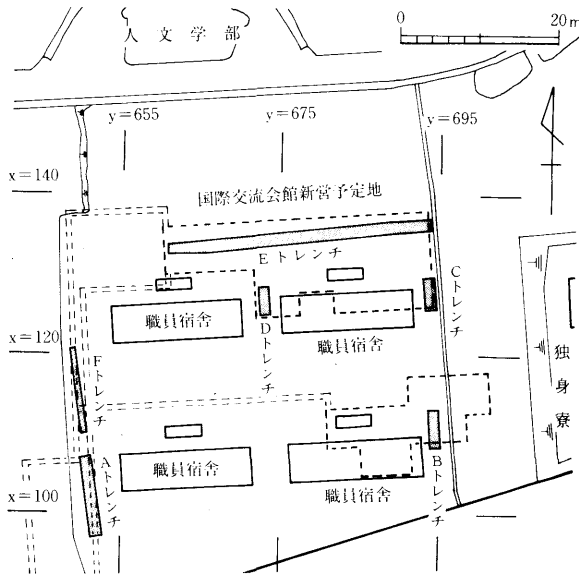


Fig. 23 トレンチ設定図

れたが、試掘調査の時点ではまだこの職員宿舎およびそれに伴う電気・水道等の地下埋設物、庭園等が機能していることから、できるだけこれらに影響しない地域に5本のトレンチを設定して試掘調査を開始した。なお、付随工事として配管の埋設が予定された地域に設定したトレンチで河川跡が検出されたため、規模確認のためさらに1本のトレンチを追加した。

調査は昭和61年12月4日から25日にかけて行なった。試掘調査面積は約70㎡で、工事総面積の約10.3%にあたる。

## 2 層位・遺構

### A トレンチ

新営予定地の南西端に南北方向に設定した幅1.5m×長さ10mのトレンチである。国際交流会館新営に伴う付随工事として、将来的に排水管の埋設が予定されている地域にあたるため、あらかじめ調査を行なうこととなった。

現地表面の標高は21.90m前後で、約20cmの層厚をもつ表土の下位に統合移転時の造成に伴う削平によって客土された黄褐色粘質土の地山の堆積が厚さ10～15cmにわたってみられる。後世の客土はこの1・2層までで、10～20cmの層厚をもつ第3層：暗オリーブ色土以下が非人為的な堆積層である。第3層の上面標高は約21.60mである。

第4層、オリーブ黒色土以下が河川の埋積土と考えられ、下位には砂層および礫層が厚さ40～50cmにわたって互層となって堆積している。湧水が激しく、地山はトレンチ南端部でのみ確認したにとどまった。地山上面の標高は約21.10mである。

出土遺物には第3層から歴史時代土師器皿、第4層から弥生土器壺、瓦質土器鍋などがある。

### B トレンチ

新営予定地の南東端に南北方向に設定した幅1.5m×長さ5mのトレンチである。現地表面の標高は約22.40～50m。表土の層厚は約20～40cmで、南に向かうにつれて厚くなる。

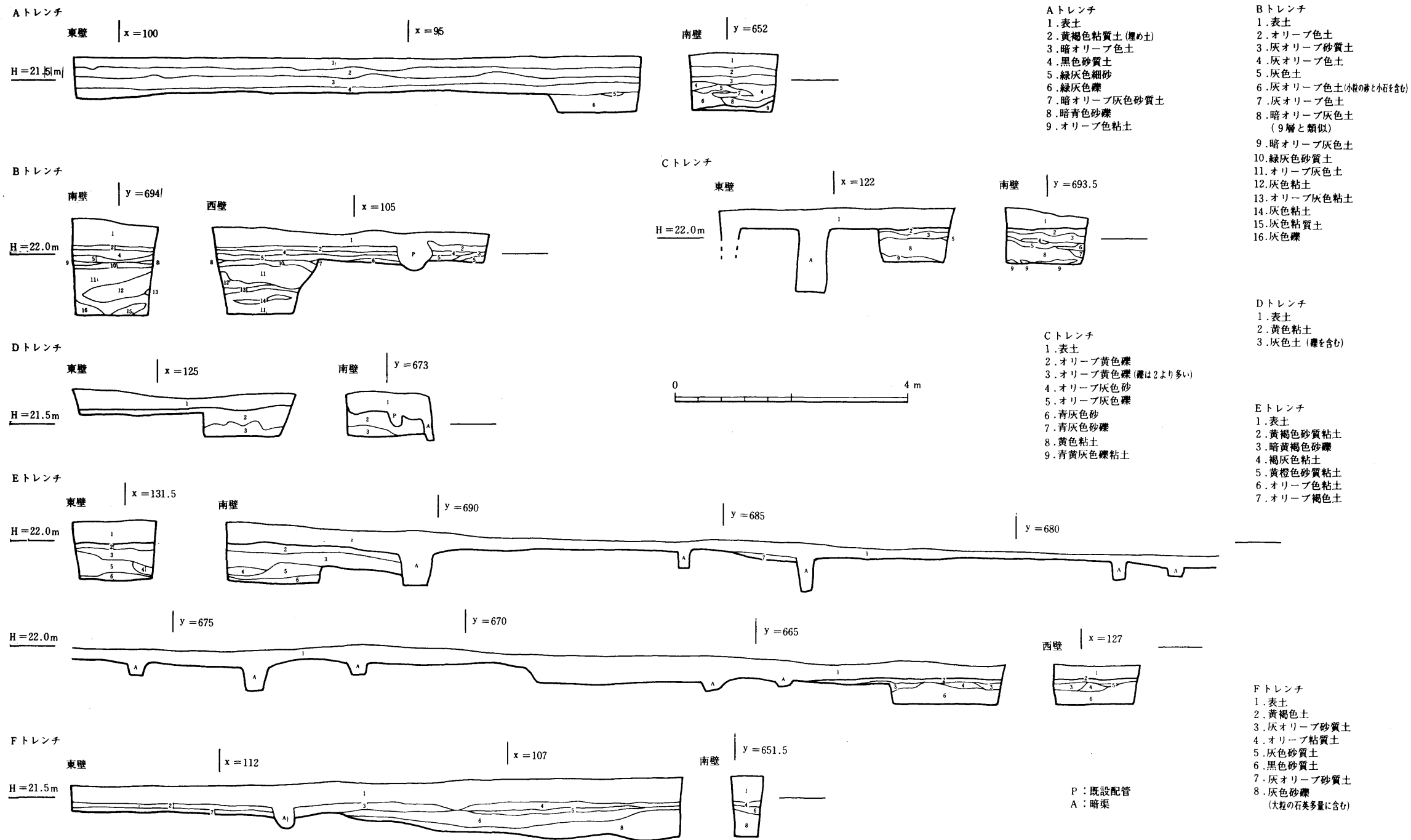


Fig. 24 土層断面図

## 層位・遺構

表土下位には各々約10cmの層厚をもつ第2層：オリブ色土、第3層：灰オリブ色土、第4層：灰色土の堆積がみられ、若干の弥生土器を包含する。

第5層：暗オリブ灰色土以下が河川の埋積土で、灰色もしくはオリブ色の粘土層、砂礫層がブロック状に堆積しており、現地表面から約1.6m掘り下げた段階でも地山は検出されなかった。

### Cトレンチ

Bトレンチの北約12mに南北方向に設定した幅1.5m×長さ4mのトレンチである。現地表面の標高は22.50m。トレンチ内では後世の削平が著しく、厚さ約30cmの表土の直下がオリブ黄色礫混じり粘土の地山で、旧耕作土、床土および遺物包含層は認められない。また、顕著な遺構・遺物も認められず、わずかに幅約50cm、検出面からの深さ約1.1mの現代の暗渠1条を検出したにすぎない。地山の検出面の標高は約22.20m。

### Dトレンチ

Cトレンチの西方約20mに位置する既設の宿舍間に設定した幅1.5m×長さ4mのトレンチである。現地表面の標高は約22.10m。Cトレンチ同様厚さ約20～40cmの表土直下が黄色粘土の地山であるが、埋設物等の掘削による後世の削平が著しい。地山の検出面の標高は約21.60～80m。トレンチ内での顕著な遺構・出土遺物は皆無であった。

### Eトレンチ

新営予定地の最も北側に東西方向に設定した幅1.5m×長さ34mのトレンチである。現地表面の標高は東端部で約22.50m、西端部で約21.70mで、東から西へ緩やかに下降している。表土は、薄いところで約10cm、厚いところで約45cmの層厚をもち、表土直下が黄褐色砂質粘土の地山である。地山は東から西へわずかに下降しており、地山面の標高は約21.70～22.00mである。

この地山を掘り込んで、幅約20～40cmの現代の暗渠が8条にもおよび検出されたほか、 $y = 745.5$ 付近以西の地山がさらに階段状に約35cm低くなっていることから、大学移転前の近年の水田耕作や移転に伴う造成工事等により大規模な削平が行なわれたものと考えられる。

$y = 759$ 付近で、幅約1m以上のオリブ褐色土の充填した溝状遺構が検出されたが、残存状態は悪く、深さは検出面から約10cmを残すにすぎない。

溝状遺構からの出土遺物には、須恵器坏身、瓦質土器、歴史時代土師器若干のほか、鉄砲玉1個がある。また、表土および攪乱層からは須恵器甕、歴史時代土師器、瓦質土器、

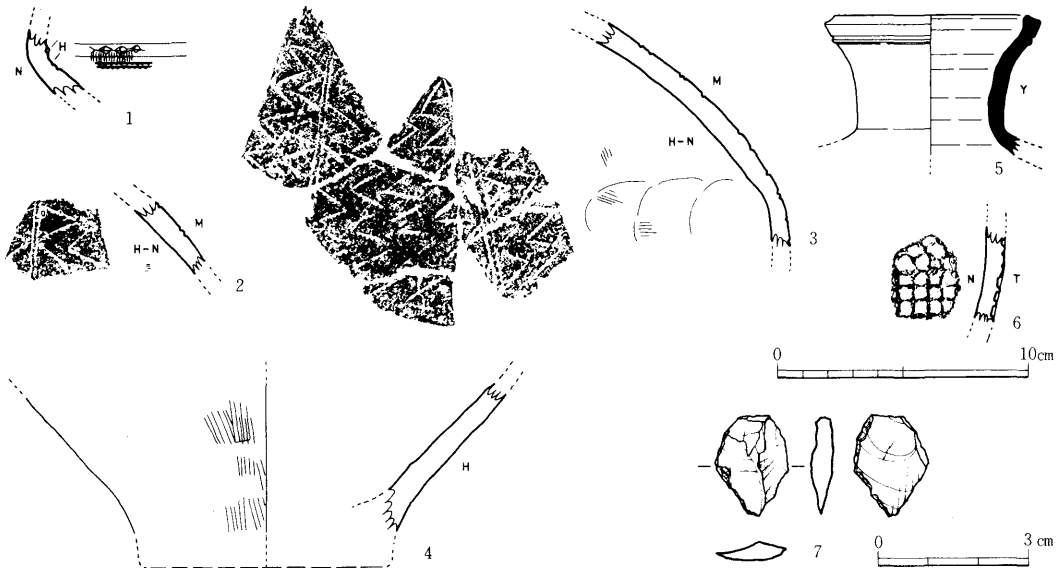


Fig. 25 河川跡出土遺物実測図

須恵質土器、および陶器甕が出土している。

Fトレンチ

Aトレンチで検出した河川跡の規模を把握するためにAトレンチの北方約3mに南北方向に設定した、幅0.6m×長さ11mのトレンチである。

掘削の結果、トレンチのほぼ中央、x=110付近で、地山が南へ下降しており、この落ち込みに、灰色砂質土およびAトレンチで認められた河川の埋積土である黒色砂質土、そしてその下位に礫層が堆積していることが確認された。河川の検出面の標高は約21.30mで、トレンチ南端部付近で検出面から最深63cmの深さをもつ。また、Aトレンチでの調査所見を合わせ考えた結果、この河川は幅19m以上におよぶ大規模なものであることが明らかとなった。

この河川の流れていた時期は、河川からの出土遺物が少ないため決め手を欠くが、Aトレンチでの出土遺物も合わせ、弥生土器、須恵器が比較的多いこと、また河川より上層からの出土遺物も同様のものが多いため、現段階では弥生時代前期～古墳時代後期の年代を与えておきたい。

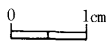


Fig. 26  
溝状遺構出土遺物実測図

Fトレンチでの出土遺物には、河川跡から須恵器壺、加工痕ある剥片がある。また、表土中からは須恵器、歴史時代土師器、瓦質土器、国産陶磁器がある。

遺物

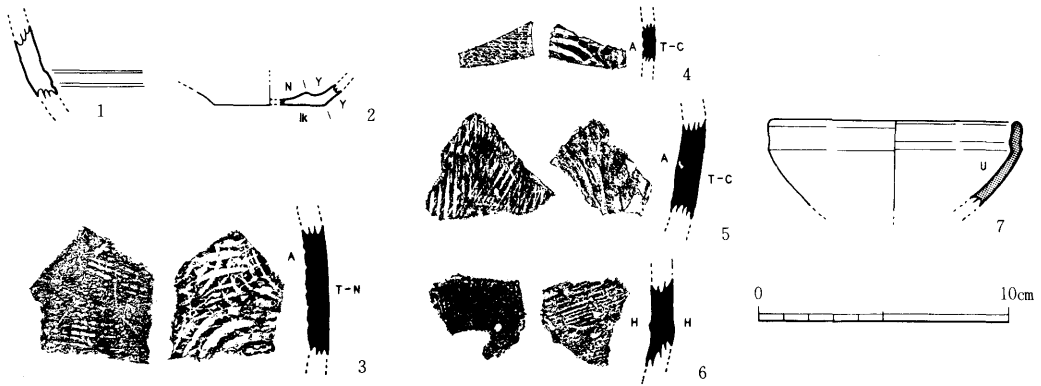


Fig. 27 包含層その他の出土遺物実測図

3 遺物

河川跡出土の遺物 (Fig. 25, PL. 15(3))

1～4は弥生土器で、同一個体の可能性がある。1は頸部で、肩平な低い突帯を貼付し、刷毛原体小口によると思われる刻み目を施す。また、突帯の下位にはタマキ貝による2条の沈線が巡る。外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。2・3は肩部で、横1本、縦2本の沈線によって分割された区画内にやや乱雑な無軸羽状文を施文する。工具はいずれもタマキ貝を用いている。外面ヘラミガキ、内面刷毛目のち丁寧なナデ仕上げを行なうが、下半部は整形時の指圧痕が明瞭に残る。4は底部付近で、外面縦刷毛目、内面風化のため不明。

5は須恵器壺。緩やかに外反する口縁部をもち、口縁端部は内側へツマミ出されたように内彎気味に肥厚する。外面には口縁端部よりわずかに下位に1条の沈線が巡る。口縁端部外面を除いて内外ほぼ全面に自然釉が付着する。内外面とも横ナデ仕上げ。6は外面に格子目タタキを施す瓦質土器の鍋と思われるもので、内面はナデ仕上げ。

7は左右両側縁に丁寧な二次加工を有する剥片で、小振りの縦長剥片を素材とする。正面上部左半の剥落のため、打点の除去作業が行なわれたかどうかは不明。姫島産黒曜石製。

1～4・6はAトレンチ第4層、5はFトレンチ第7層、7はFトレンチ第6層出土。

溝状遺構出土の遺物 (Fig. 26, PL. 15(3))

径1.0cmのほぼ球形に近い鉛製の鉄砲玉。整形時に転がしたと思われる、帯状の平坦面をもつ。Eトレンチ出土。

包含層その他の出土遺物 (Fig. 27, PL. 15(3))

1は弥生土器壺の肩部。外面には削り出しによる段をもち、その下位にヘラによる1条

の沈線が巡る。内外面とも風化著しく、調整は不明。Bトレンチ第3層出土。2は糸切り底の土師器小皿で内外面とも横ナデ仕上げ。Aトレンチ第3層出土。

3～5は須恵器の壺ないしは甕の胴部で、外面平行タタキを施すが、3はナデ消している。6は須恵質土器の甕ないし壺で、内外面とも刷毛目仕上げ。7は天目の埴で、口縁部は体部から屈曲して垂直に近く立ち上げる。口縁端部は丸く終わる。

3・6はEトレンチ表土、4・5はEトレンチ攪乱層、7はFトレンチ表土中よりの出土。

Tab. 4 出土遺物観察表

法量( )は現存値

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色	調	胎土	焼成	備考
河川跡 (Fig.25)								
1	弥生土器 壺	—	(2.6)	器表—浅黄色 (2.5Y7/3) 器肉—黒色		良好 3mm以下の石英・長石を含む	良好	Aトレンチ第4層出土
2	弥生土器 壺	—	(2.8)	器表—浅黄色 (2.5Y7/3) 器肉—黒色		良好 3mm以下の石英・長石を含む	良好	Aトレンチ第4層出土
3	弥生土器 壺	—	(8.8)	器表—浅黄色 (2.5Y7/3) 器肉—黒色		良好 3mm以下の石英・長石等含む。金雲母含む	良好	Aトレンチ第4層出土
4	弥生土器 壺	—	(5.8)	器表—浅黄色 (2.5Y7/3) 器肉—黒色		良好 3mm以下の石英・長石等かなり含む	良好	Aトレンチ第4層出土
5	須恵器 壺	7.8	(5.6)	器表—灰白色 (N 7/0) 自然釉—灰オリーブ色 (7.5Y4/2)		普通 1mm以下の長石等含む	良好	Fトレンチ第7層出土
6	瓦質土器 鍋	—	(3.7)	器表—にぶい黄橙色 (10Y7/4) 器肉—暗灰色 (N 3/0)		良好 1mm以下の砂粒若干含む	良好	Aトレンチ第4層出土
包含層その他 (Fig.27)								
1	弥生土器 壺	—	(2.9)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)		やや不良 3mm以下の石英・長石かなり、他金雲母含む	不良	Bトレンチ第3層出土
2	土師器 皿	*4.2	(0.8)	淡黄色 (2.5Y8/3)		良好 1mm以下の砂粒少量含む	普通	Aトレンチ第3層出土
3	須恵器 甕か壺	—	(5.2)	器表—青灰色 (5 B6/1) 器肉—暗赤褐色 (10R3/2)		良好 2mm以下の長石等若干含む	良好	Eトレンチ表土中
4	須恵器 甕か壺	—	(1.5)	明青灰色 (5 B7/1)		良好 2mm以下の長石含む	良好	Eトレンチ攪乱層土中
5	須恵器 甕か壺	—	(4.0)	緑灰色 (10GY6/1)		やや粗 1mm以下の砂粒若干含む	良好	Eトレンチ攪乱層土中
6	須恵質土器 甕か壺	—	(3.2)	灰白色 (N 7/0)		やや粗 3mm以下の石英・長石等若干含む	良好	Eトレンチ表土中
7	陶器 埴	9.8	(3.4)	素地—淡黄色 (5 Y8/3) 釉—極暗赤褐色 (2.5YR2/2)		良好	良好	Fトレンチ表土中
No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	備考	
河川跡 (Fig.25)								
7	加工痕のある石器剥片	2.0	1.4	0.4	0.9	黒曜石 (姫島産)	Fトレンチ第6層出土	
溝状遺構 (Fig.26)								
—	鉄砲玉	1.0	1.0	1.0	6.5	鉛	Eトレンチ	

#### 4 小 結

##### (1) 検出遺構と出土遺物について

A・B・F各トレンチで、弥生時代前期～古墳時代後期を主体とする遺物が出土した幅19m以上の河川跡を検出した。この河川は、Fトレンチ中央部でその川岸の落ち込みが確認されたこと、そしてBトレンチの北約12mに設定したCトレンチでは河川跡が検出されないことなどから、既設の支障埋設物等によって調査ができなかったB～Cトレンチ間に川岸の落ち込みのあることが予想され、他のトレンチで検出した溝底の高低差および周辺の地形から推して、ほぼ東から西に流れていたものと考えられる。

また周辺では、今回の調査地の北西約100mのところ昭和55年度に実施した経済学部大講義棟新営に伴う試掘調査の際にも、遺物はほとんど出土しなかったが、幅22m以上の河川跡が検出されており、同一河川の可能性がある。

その他の遺構には、Eトレンチで検出した中世～近世の溝状遺構1条があるが、残存状態は極めて悪い。これは、独身寮の東に位置する附属農場飼料園から西に伸びる丘陵が、C～Eトレンチ付近で統合移転時の造成等により大規模に削平されているため、C～Eトレンチ付近に遺構や遺物包含層が存在していたとしても、すでに消失しているものと考えられる。表土および攪乱層から出土した各時期の遺物も、こうした後世の削平によって、遺構・遺物包含層から遊離した可能性が高い。

出土遺物には、弥生時代から江戸時代にかけてのものがある。量的には多くはないが、なかでも河川跡から出土した弥生土器壺は、いずれも同一個体と考えられるもので、特徴的な文様構成をもっている。すなわち、肩平な低い貼付突帯の下位を、縦2本および少なくとも横1本のタマキ貝による沈線で分割した区画内に、羽状文を施文するもので、下東遺跡 YP-28、西遺跡13号土壙に良好な一括資料がみられ、前期末の綾羅木Ⅲ式併行期と<sup>1)</sup>考えられる。学内ではこの期の遺構が少なく、昭和60年度に行なった大学会館前庭部の環境整備に伴う試掘調査で、袋状堅穴が検出されているにすぎない。<sup>2)</sup>

なお、キャンパスの南端部を巡る排水溝掘削時に、今回の調査地の南西約110mの地点<sup>3)</sup>で、弥生時代前期の堅穴住居跡が検出されたとされていること、第四章で述べる大学敷地の南縁部を弧状に巡る送水管の埋設工事に伴う立会調査で、野球場南東端部から南門にかけての地域に前期末から中期初頭の遺物包含層が検出され、その北側では遺構と思われる落ち込みが確認されていることなどから、当該地域周辺にこの時期の遺構が埋存している可能性が高く、今後の調査が待たれる。



(2) 埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

資料館は、調査終了後、上述した国際交流会館新営予定地内での試掘調査結果を同運営委員会に報告事項として諮り、埋蔵文化財に関するその後の取扱について協議を行なった。

同委員会は、新営予定地の北半部に設定したC～Eトレンチでは、わずかにEトレンチで中～近世の溝状遺構一条が検出されたにすぎず、残存状態も極めて悪いこと、また、附属農場飼料園から西へ延びる丘陵が、C～Eトレンチ付近で大規模に削平されていることから、新営予定地北半部では過去に遺構、遺物包含層が存在していたとしてもすでに消失している可能性が高いものと判断した。

しかし、新営予定地南半部のA・B・F各トレンチで、弥生時代前期～古墳時代後期を主体とする遺物が出土した幅19m以上の河川跡が検出されたことから、埋蔵文化財に関する適切な善後策を講ずる必要があると指摘し、試掘調査によって十分把握されていない河川跡の規模、機能していた時期、流路などを明確にするための調査方法を検討した。

その結果、トレンチの規模と比較して河川跡からの遺物の出土量が少なく、新営予定地内を走行する河川跡から多くの遺物が出土する期待があまりもてないことから、河川跡の埋存が予想される地域について工事施工事に立会調査を実施することとし、埋蔵文化財に関する資料の蓄積を図ることが至当であると結論づけた。 (河村)

〔注〕

- 1) a 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡」(『国道9号・山口バイパス 下東遺跡・萩峠遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第30集、1975年)。  
b 山口市教育委員会「西遺跡」(山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年)。
- 3) a 山口大学吉田遺跡調査団「山口大学吉田遺跡発掘調査概報」(1976年)。  
b 小野忠熙「山口大学構内吉田遺跡の性格」(『学園だより』、山口大学、1970年)。



(1) Aトレンチ全景(北から)



(2) Aトレンチ遺物出土状況(東から)



(3) Bトレンチ全景(北から)



(4) Bトレンチ南壁土層断面(北から)

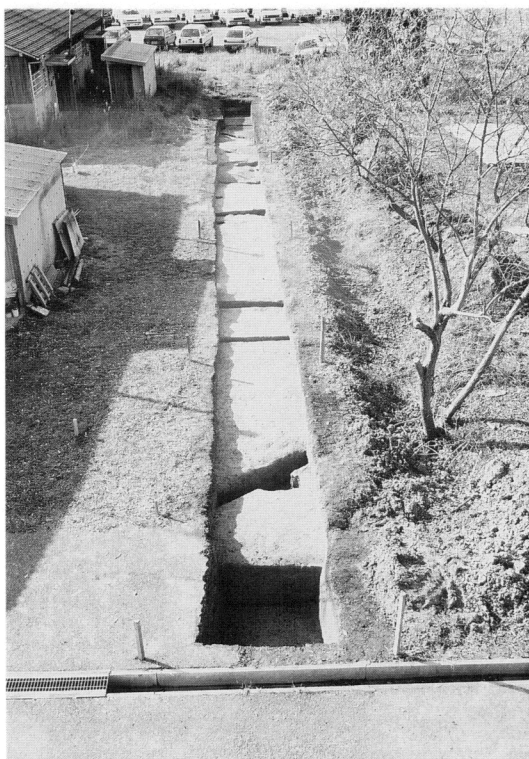
吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査(2)



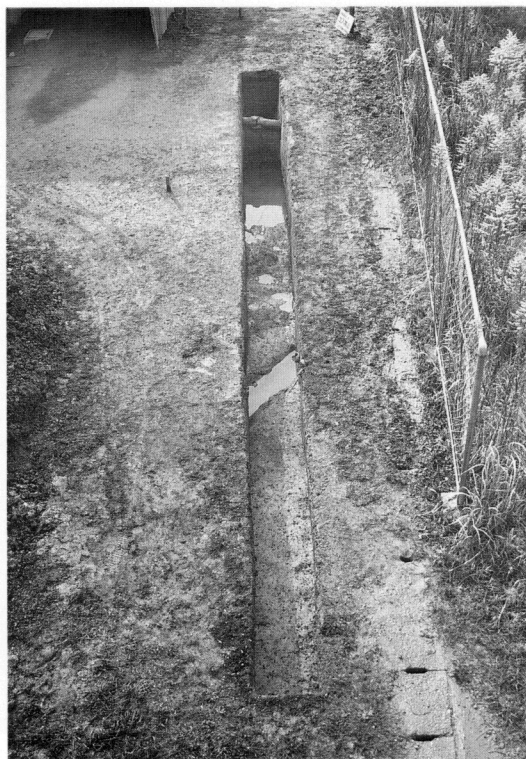
(1) Cトレンチ全景(北から)



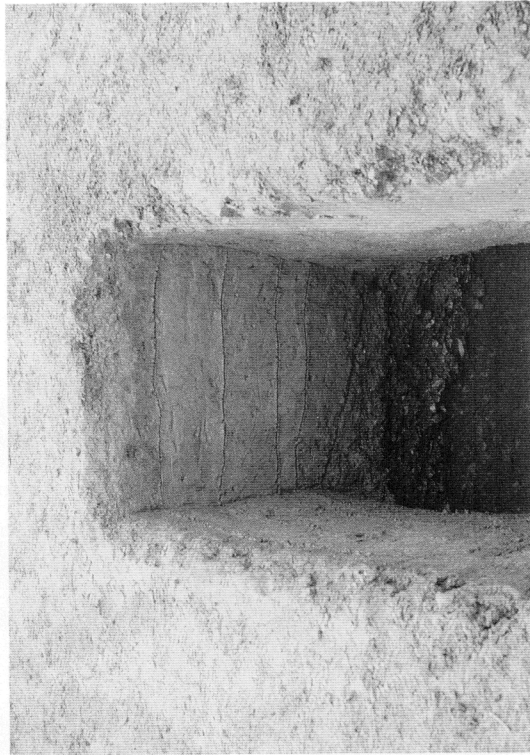
(2) Dトレンチ全景(北から)



(3) Eトレンチ全景(東から)

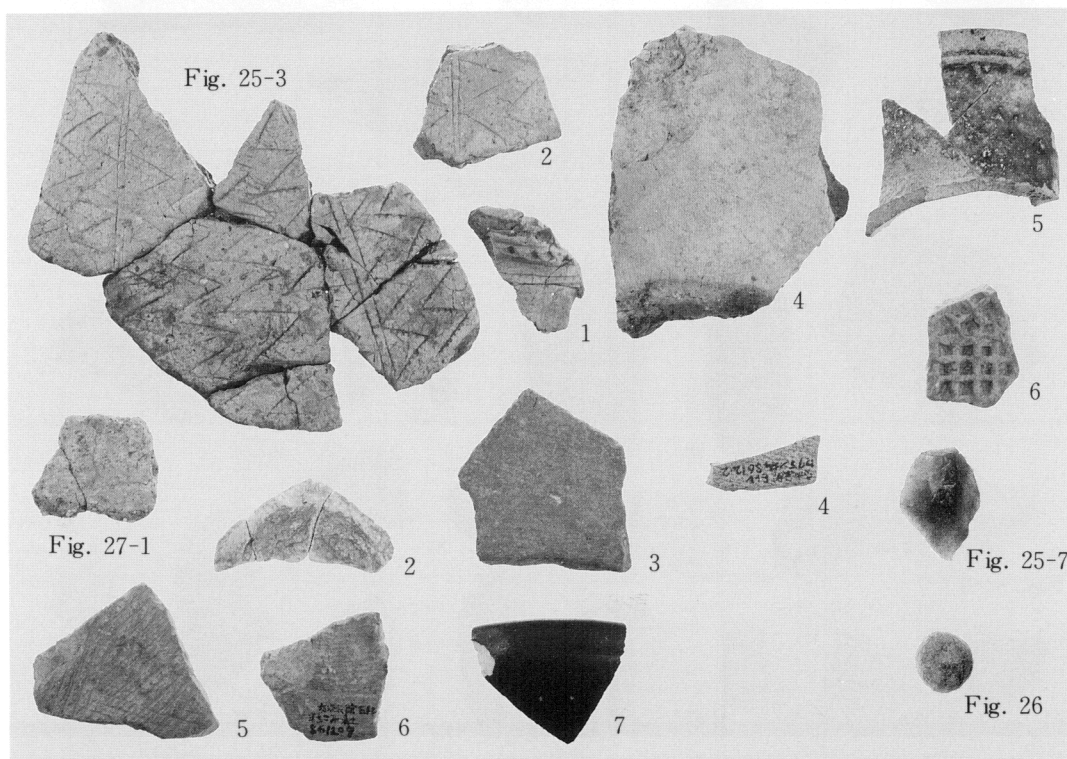


(4) Fトレンチ全景(北から)



(1) Fトレンチ地山落ち込み状況(西から)

(2) Fトレンチ南壁土層断面(北から)



(3) 出土遺物